神楽名 # 小川神楽

伝承地 小川地区
西米良村大字小川

指定等 国指定重要無形民俗文化財

伝承団体 小川神楽保存会
代表　中武 広幸

荒神の舞

❖ 神楽の概要・由来・その他

小川地区は宮崎県西米良村の東側に位置し、一ツ瀬川の支流である小川川沿いにある。地区の中心地には、江戸中期から明治維新に至るまでの約200年にわたり米良郷を治めた米良氏の居城、小川城の址がある。南北朝の争乱で南朝側として戦ってきた肥後菊池氏が米良山中に逃れ、名を米良と改め、小川の地を拠点としたと伝わる。

小川神楽は、小川地区の鎮守で御祭神を大山祇命・磐長姫命とする米良神社に伝わる。元禄16年(1703)の大洪水により社殿は川上に漂い、留まったのが現在の地であるといわれ、棟札には宝永２年(1705)米良領主則信公により再建された記録が残る。

祭り前日の夕刻、準備が整うと神を勧請する逆(注連柱)が立ち、「逆建立の舞」が舞われる。祭り当日、米良神社に面様が到着すると、伶人は米良神社対岸の神山に登り、御神体が鎮座する本宮で神事を行い、主祭神を本殿に迎える。同時に別の伶人らは小川地区沢水と囲の菊池家累代の墓に参り御幣を捧げ、猪や鹿などの霊を祀る。

小川神楽は龍房山を挟んだ銀鏡の地より伝習したといわれており、銀鏡には小川と同様に磐長姫命の伝説が残っている。

❖ 芸能の機会・場所

- 小川夜神楽…12月第２土・日曜日　米良神社神楽殿にて奉納
- 月の神楽…９～10月の満月の夜　おがわ作小屋にて奉納

❖ 演目一覧

祭典式・修祓
八幡大神様
ハサミ
鹿倉大神様
ていの舞
手力男命(上)
火の神

清山
幣差
菊池殿宿神様
カンスイ
蛇神楽
戸破
成就神楽

花の舞
折立宿神様(若様)
天神様
エナ褒め
一人剣
手力男命(下)

地割
住吉
幣差
弓将軍
大神様
唐っ旦

ハサミ
御祭神舞
吹将軍様
荒神の舞
伊勢の神楽
田の神

※平成29年（2017）12月に奉納された演目に基づく

演目の特徴

面様をお迎えする前には、場を清め結界を張るため、素面の舞(地舞)が舞われる。米良神社御祭神である磐長姫命が出座される「御祭神舞」までは厳粛で優雅な舞が続き、その後の演目からは勇壮で賑やかな舞となり、神楽せり歌も出て、座が盛り上がる。

小川神楽の「荒神」は印象的な青の面で、水神とされており、足下の蛇（藁蛇）はその使いである。荒ぶる神は神主との長い問答の末に怒りを鎮める。そして次の「蛇神楽」では蛇切りを行い、智剣をもって悪念妄想を断ち切ることを表現する。

「エナ褒め」は「あまほめ」ともいう。御神屋中央に下がる「アマ」(天蓋)には切り紙を包んだ「ハチノス」が下がる。アマは胞衣に見立てられ、天の霊徳を誉めたたえる神楽であるとされる。あまほめ面は、面棒でハチノスを突きながら跳躍し、面白おかしく舞う。

その他の特徴

- 面…折立宿神様(若様)、磐長姫命、菊池殿宿神様、天神様、吹将軍様、鹿倉大神様、エナ褒め(アマホメ)、荒神(水神)、大神様、手力、戸破、田の神　等
- 楽…太鼓、笛、鉦、法螺貝
- 装束…白衣、白袴、狩衣、素襖、千早、着物、羽笠、烏帽子、冠　等
- 採り物…鈴、扇、御幣、面棒、刀、弓、矢、榊、襷、御膳　等
- 文書…「唯一神道大祭神事」(嘉永３年(1850)６月)、「神樂歌」(明治40年(1907))、「伶人必携米良神社社務所編」(昭和40年(1965)12月)、「米良山の神楽調査報告書」(令和２年(2020))　等

伝承の現状・課題

平成31年(2019)現在、伶人22名で神楽を奉納している。平成29年(2017)の國學院大學での神楽公演参加など、伝承活動にも意欲的に取り組んでいる。

集落の人数は約90名であるが、小川城址公園内の交流施設「おがわ作小屋村」には年間２万人を超える観光客が訪れる。９月から10月の満月の夜に「月の神楽」というイベントを開催し、小川神楽はもとより、村内外の神楽の周知の一翼を担っている。

御祭神舞

カンスイ

エナ褒め

宮崎県教育委員会　文化財課　平成31年（2019）３月発行
令和５年（2023）３月再発行